



運動会から見える日常

前川 良太

先日は天候にも恵まれ、運動会を行うことができました。直前に風邪やインフルエンザに罹ってしまい、全員揃って参加はできませんでしたが。それでも久しぶりに観覧の人数制限を設けず家族みんなで見守り、門外では卒園児たちも見に来ていたり、ようやくいつものつばさの運動会の風景が戻ってきてうれしい気持ちになりました。

つばさの運動会は日常の延長線にある一日です。来られなかった子も、運動会できなくて残念だったけど、またやればいいやんと子どもたちは話をしていました。ぞうぐみさんは運動会が終わってさらにドッチボール熱が高まったようです。当日が終わってそれでおしまいではないのではなく、これからも続く日常が確かにそこにあるのです。

子どもたちの葛藤はもちろんのこと、大人たちも葛藤しながら当日までの日々を過ごしてきました。それは日ごろから子どもたちの課題だと感じていたことが、運動会へと向かう日々の中でより明るみに出るからです。個性豊かでそれぞれ得意不得意の大きなきりんぐみさん。どんなふうすれば子ども一人ひとりが輝きながらみんなで楽しめるか。まさにインクルーシブな運動会にするために必要な大人の役割や子どもたちへの投げかけに葛藤していました。ぞうぐみさんはなかなか子どもたちの心の中が見えてこないことに、どうしたものかと葛藤をしていました。だけど日々を積み重ねながら、実はできる最大限の気持ちは言葉にしていたり、表情や家での会話なんかには本心が表れていました。むしろ課題だったのは、決められたことには沿おうとするけど、なかなか“自分ごと”として考えられるようになるまでには、ゆっくりじっくり時間のかかる子たちだということが、やり取りする中で少しずつ見えてきました。まさに子どもの課題と背中合わせにあったのは、大人たちの課題だったのです。そしてその課題を5歳児の担任は保護者の意見も聞きたいと、みんなで考え合う懇談会を行いました。保護者の人たちは当日を迎えるまでの過程をどんなふうに見ていたのかという意見や、二人の葛藤を励ましたり時に違った視点から見えることを率直に話してくれました。そんな懇談ができたのもまた、日ごろの関係があればこそです。

つばさの運動会は与えられたことをこなすでもなく、できるかどうかの能力を見せる場ではありません。子どもたち一人ひとりが“自分ごと”として取り組んでいくのです。子どもたちは体験したことの範囲でしか発想は広がっていきません。だからこそ大人が提案することだってあります。だけどそれを決めるイニシアティブは子どもたちにあります。自分たちの日々を自分たちの手で。そんな日々の一コマだからこそ、見ている大人の心を打つ運動会になったのではないのでしょうか。



ちなみに、姉妹園のアトムでは一般的にイメージする運動会らしくないからと保護者の人たちが提案して「アトムフェスティバル」と呼んでいます。つばさの運動会のありかたも、保護者の皆さんと一緒に考えていきたいですね。